

「第四十一回庭野平和賞」贈呈式 ご挨拶

庭野平和財団名誉会長

庭野 日鏡

「第四十一回庭野平和賞」の贈呈式にあたり、ご挨拶を申し上げます。

受賞者はもちろんのこと、庭野平和賞委員会の皆さま、さらには各界の諸先生をはじめ、関係諸団体の皆さまに多数ご参加を頂き、あつく御礼申し上げます。

今年度の「庭野平和賞」受賞者は、アメリカン大学国際学部教授のモハメド・アブニマー博士でございます。

本日は、奥さまのイルハム・ナサール博士はじめ、ご家族もお見えになっています。遠路はるばる、ようこそおいでくださいました。

加えて、選考にあられた庭野平和賞委員会の皆さまに、深く敬意を表し、お礼を申し上げます。

アブニマー博士は、人々が、民族的、国家的、宗教的な隔たりによって、暴力の連鎖、怨みの連鎖に巻き込まれていく現実を変えるため、今日まで心血を注いでこられました。

現在、アブニマー博士は、紛争解決と平和構築の研究者であると同時に、実際の紛争調停にも取り組まれています。また、諸宗教対話の積極的な推進者であり、次世代に対立を超えた共生の道を示す教育者でもございます。

そのような多様な取り組みの根底をなすのは、イスラームの教えから導き出された「赦しと和解」の精神であると伺っております。博士は、イスラームにおける「赦しと和解」の教えこそが、本来のイスラームの平和観であることを明確に示され、その確信をもとに具体的な活動を進められています。

私は、この「赦しと和解」の精神は、あらゆる宗教に共通する重要な普遍的な価値観であると受けとめています。

私は仏教徒ですから、少し仏教の話をさせて頂きます。

初期の仏典である法句経に、「怨みは怨みによって報いれば、ついに消えることはない。怨みを捨てるとき、それが消えるのである」という言葉があります。この教えには、古くから伝承されてきた物語があります。それは、次のような内容です。

ある日、一人の修行僧が、戒律を破るような行為をしました。すると、無罪を主張するグループと、許してはならないとするグループが対立し、暴力沙汰に及ぶほどになりました。そこで釈尊が仲介に入られたそうです。

釈尊は全員を集めて、こんな話をされました。

「昔、コーサラ国に長寿王という名君がいて、その国は大変繁栄していました。一方、隣国のバラナシでは、王の暴政で国は乱れていました。やがて隣国は、コーサラ国の侵略を謀ったのです。

長寿王は『戦えば国土は荒れ、多くの死傷者が出る』と不戦を主張しました。しかし、その主張もむなしく戦闘状態に入りました。

長寿王は、自分が姿を消せば戦争は収まるだろうと考え、山中に隠れました。そのお陰で大きな戦争にならずに済みました。しかし、コーサラ国は属国となり、長寿王は捕らえられ、処刑されることになってしまいました。

長寿王には、長生太子という子供がいました。処刑される際、長寿王は、自分を見ている長生太子を見つけ、この子はいずれ、仇討（あだう）ちをするであろうと思い、天を仰ぎながら叫びました。

『私は人民の命を守るために喜んで死んでいくのである。もし私の仇（あだ）を討とうとする者があれば、復讐はまた復讐を生み、永遠に消えることはない。私のために人殺しをしてはならない』と。

しかし、長生太子の怨みは消えません。つてを求めて、敵の王に近づき、ある日、狩りのお供をすることになりました。途中、疲れた王が眠り込んだのを見て、剣を抜いて刺そうとしました。しかし、父の最後の遺言が重く心にのしかかって、どうしても刺すことができません。

やがて王は目を覚まし、こう言いました。『不思議な夢を見た。長寿王の息子が私を刺そうとしたのだが、どうしたわけか剣を捨て出ていった』と。

それを聞いた長生太子は、自分の素性を明かし、いま自分がしようとしたことを正直に話しました。

すると王は、『太子よ、私はあなたに謝らなければなりません。長寿王のよくな立派な王を殺してしまいました。私は、あなたの親孝行な心と寛容な心によって、身心ともに生まれ変わりました』と心から詫び、二人はしっかりと手を握り合いました。

やがて王は、コーサラ国を長生太子に返し、以降、両国は兄弟のように仲良くなったといいます」

こうして話を終えられた釈尊は、「怨みは、怨みを捨てるとき、それが消えるのである」と修行僧たちに諭されました。そして、両派の争いは収まったと伝えられています。

以上、少々長いご紹介になりましたが、この説話は、戦いを繰り返し、憎しみ合った者たちにも、やがては心の通い合う日が来ることを、象徴的に表しています。仏教の説話ではありますが、異なる宗教の方々も、その主旨はご理解頂けるのではないかと思います。

アブニマー博士が示されるようにイスラームには、「赦しと和解」の教えがあります。キリスト教徒の方々は、「愛」に生きることを大事にされています。私ども仏教徒は、「慈悲」にあふれた世界を目指して精進しています。

このように、さまざまな宗教の根底には、共通する普遍の真理、真実の道理があり、本質的には一つの道を歩んでいるのだと私は信じます。

紛争の続く地域に、たとえ恒久的な停戦合意がなされたとしても、人々の心に怒りや怨みの心がくすぶる限り、いつまた争いの種に火がつくか分かりません。

いま申し上げた「赦す心」「愛の心」「慈悲の心」を中心にした働きこそが、この世を平和に導く根源の力となっていくのではないのでしょうか。

とりわけ、アブニマー博士は、次代を担う若い人たちに対して、「赦しと和解」をもとにした平和教育を施し、対立を超えた共生の道を示しておられます。

そのような歩みを、地道に、情熱を持って続けてこられたアブニマー博士を、心から称賛し、深く敬意を表するものであります。

昨年十月以降、パレスチナ自治区ガザ地区でのイスラエルとイスラム組織ハマスの戦闘が続いています。

犠牲者の多くは、子供や女性であるといわれています。イスラエルで生まれ育ったアブニマー博士の悲しみは、どれほど深く、重いものでありましょう。

しかし、そのような時であるからこそ、アブニマー博士の経験や知見をより多くの人々にお伝え頂き、共に生きる世界に向け、一層のリーダーシップを発揮してくださることを念願してやみません。

本日の贈呈式を契機として、アブニマー博士の願いと行動を、より多くの人々が共有することを期待し、またご健康で、これまで同様にご活躍くださることを祈念して、挨拶と致します。

ありがとうございました。